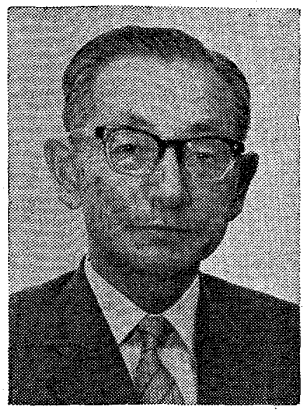

新 年 を 迎 え て

会 長 湯 川 正 夫

昭和 40 年の新春を迎えるに際し，われわれの日本鉄鋼協会と会員各位のなお一層の御発展と御健康を祈り，かつわれわれの熱意をもつて，日本の鉄鋼業界，ひいては全産業界の力強い前進を強力に支持せんと決意するものであります．

日本鉄鋼協会は，本年2月に創立 50 周年を迎えます．この永い期間にわたり協会活動の発展に努力された先輩諸賢，および現在これを強力に支持する九千余名の会員各位にとつては，50 周年を迎えることは誠に喜ばしい限りであります．本年 4 月の年次総会には，この 50 周年を記念する式典を併せ行ない，鉄鋼の学術と技術に関するわれわれの学会の着実な発展状況を国の内外に広く認識して頂くことになつております．

顧りみますと，設備技術ともに荒廃の極に置かれた戦後より，業界，経済界の諸先輩の非常な努力により復興と隆盛の一途をたどつてきた日本鉄鋼業は，遂に世界第一流の鉄鋼生産国の名誉を担うに至りました．その過程においては，幾度かの経済要因の変動による浮沈があつたにせよ，その停滞過程は常に次の飛躍段階のための準備時機ならしめた努力の蓄積過程に変えられて，ひとたび業界が発展気運を示すとき，それは驚くべき底力を示したのであります．現在のわれわれの立場は，過去の例にもあつたように，業界の拡大強化の速度にブレーキをかけられた状態にあります．しかし先輩諸賢の明にならい，われわれはこの時期を無駄に費すことはできない．鉄鋼業の発展はその「質」と「量」の両面から果されねばならないのは当然であり，理想はその両面がバランスを保ちつつ並進的に発展してゆくことであるが，その一面に制約が加えられた場合には，むしろ他面をできる限り伸ばしておくべきであります．この意味で業界がその「量」的発展を抑えざるを得ない本年は，「質」すなわち学術と技術の方面において従来を凌ぐ充実と発展を遂げねばならないのであります．経済的制約はむしろ，それらを促進せしめる作用すら有していると云つてよいでありましよう．従つて，われわれは今年を鉄鋼に関する学術技術の革新の年となし，その充実と発展をわれわれの第一目標としようと思うものであります．

技術革新の時代であるとはいえ，われわれが気付かねばならないことに，この時代においては，われわれには独創性に富む成果を挙げる義務があるということであります．単に，外国から学術や技術を摂取，吸収することで，わが事成れりという安易な方法は，日本の鉄鋼業の実力と名誉からして，もはや採るべきではないと思われます．われわれ自身の努力と労苦に成る新しい技術や学術を実らせるには，かなりの時間的経済的犠牲を覚悟する必要はありますが，しかしそれに堪え，世界に誇り得る成果を可能ならしめる道を歩む方が，永い将来を見通す場合，より賢明であるといえましよう．

これに関連して，私が諸士の注意を惹きたいことに次のような事柄があります．すなわち，鉄鋼業に不可欠なものに，例えば，熱源と還元剤があります．前者の主流は石炭と重油でありますが，これに近い将来，原子力発電による電力が加わつてくることは予測に難くありません．まして，将来のエネルギー主源となろう暁には，将来の鉄鋼業においてどのような形でその豊富で安価であろう電力を応用すべきかを，われわれは現時点から注目し研究開発を進めてゆかねばなるまいと思われます．また，後者については，現在の製銑過程の主役は CO ガスであるが，これに対抗するものに天然ガスが考えられま

す．わが国の地下エネルギー資源に占める天然ガスの比重がどれ程かは，一応別として，世界的には非常に豊富で安価なこの資源を製鉄にいかに活用するかも重要な研究対象となります．国内の利用可能量がたとえ限られているとしても，外地においてこれを採取液化し大型タンカーで輸入し活用することができれば，現在の原料炭輸入とコークス化を考え合わせるとき，より経済的であることはいうまでもないことであります．このように未来の鉄鋼業の発展のポイントは，原子力発電の電力と天然ガスを，更に遠い将来には核融合エネルギーをどのように鉄鋼生産に応用するかにも存在していると信ぜられるのであります．

業界のみならず，学会を眺めると，ここに行われている数多の理論的研究や解明を，どのような形で直接生産の場に結びつけ，利用せしめるかという任務を，本年はさらに一層強力に推進して頂かねばならない．現在の巨大な製銑製鋼設備の目的のきわまる所は，鉄鋼を如何に純化し，夾雑物を少くするかにあり，従つて製錬反応などに関する新原理，新方法およびそれらによる工程の単純化高能率化への方法の出現は，非常に期待されています．また，製品材質の向上と開発のため，鉄鋼の微視的構造性質の解明することとその成果を製品にいかに結びつけるかもわれわれの急務の一つであります．

学界，業界ともに，このように新たなものを求めて，研究開発を進めねばならない時代にあつては，両方の立場の間の，またそれぞれの立場の中の「共同研究」という非常に効率的な研究手段を忘れてはならない．当協会内には世界に誇るべき既存のいくつかの共同研究組織があり，新たに昨年度発足せる組織は既にその活動の軌道に乗っている．われわれはこれらを有効に活用してゆく義務と責任を有しています．そのために諸士の不断の御協力を心底から御願いしたいと思うのであります．

このように，まだ開拓すべき可能性を豊富に有する学界と産業界において活動できるわれわれは非常に幸福であると云わなければなりません．この広い活動の場を有するわれわれは，世界のトップレベルの製鉄国の鉄鋼業界に従事しているという自信と誇りを持って，われわれの日本鉄鋼協会を世界第一級の学会たらしめるべく，益々活潑に鉄鋼の学術と技術を発展せしめてゆこうではありませんか．